〔抜粋再録〕私の釧路市立郷土博物館沿革史（１）～（７）

片岡 新助（釧路市立郷土博物館初代館長）

Personal history of the Kushiro Municipal Museum

Shinsuke KATAOKA
(First director of Kushiro Municipal Museum)

はじめに《編集者より》

釧路市立博物館は平成 28 年（2016 年）7 月 14 日に創立 80 周年を迎えました。そこで、昭和 40 年（1965 年）～ 41 年（1966 年）発行の博物館館報 156 号～ 173 号に掲載された、郷土博物館初代館長片岡新助氏による「私の釧路市立郷土博物館沿革史」を抜粋して再掲し、博物館創立に至る取り組みやその後の経緯を振り返りたいと思います。

当時の館報の記事にも編集子註として「本稿は著者原文のままです。この点ご了承下さい。」と書かれていますが、今回の再掲にあたっても修正は誤字や読みづらい箇所等最低限にとどめました。現在では不適切とされる表現も一部含まれますが、当時の資料という観点でそのまま掲載しています。

なお、編者による注は〔 〕内に示しています。また、省略箇所は示しておりません。

《編集：加藤ゆき恵（釧路市立博物館）》

博物館設立の動機

釧路市立郷土博物館の沿革を書くことは私としてなんとなくおこがましい様な気がせぬでもないが、記録として考える時、やはりあったほうがよいようにも考えるので書くことにしました。

釧路に博物館を設置してみたいと夢を見たのは昭和８年の６、７月頃でした。私は小学校時代（少年時代）から昆虫や魚それに化石のようなものを集めることが大好きであったのでした。言わば生まれながら物を蒐集する癖（へき）があったのでした。中学生になった頃には鳥や獣の剥製にも興味をもつようになり、鳥や獣の皮をはいでは中に物を入れて元の体型に復原することの研究を始めたのでした。

高等二年生頃には人様に見せてもそう恥ずかしくない物を造れるようになりました。それからかれこれ 50 年やって居る様な訳で今ではなんとか一人前になれたかと自信がついて参りました。こんな私ですから軍隊生活２ヶ年（大正４年兵）除隊が大正６年でしたから今日までかれこれ 50 年釧路の皆様に御厄介になったのです。私は大正６年に釧路に参りました時は、今の釧路とは違って想像出来ない程の田舎街でした。現在の幣舞橋も木橋で現在の橋の一丁下流にあったのでした。市役所も現在のところ〔本稿が発表された昭和 40 年１月時点では市役所は幣舞町にあった。同年 12 月に黒金町の新庁舎に移転した〕ではなく真砂町〔現在の南大通〕にあって釧路町で林田則友さんが町長さんでした。

私は前に一寸書きましたように物を蒐集すること、鳥や獣を剥製することに興味を持っておりましたので珍しい材料が手に入れば片端から作って集めたのでした。こうしているうちに博物館でも造って社会教育の一端にまで進めてみたいと言う夢を見るようになったのでした。

私は現在の十條製紙釧路工場に 16 年間程働いておりました。この間も猟友会会員の人達と話し合って獲物はこれはと想うものはのがさず分けてもらい製作したのでした。こうして集めて見ましても同じものは沢山あっても変わったものとなるとなかなか手に入らなかったのでした。こうして長年かかってどうやら鳥類では鷲を始め鷹の類、水禽類その他各小鳥類等大体蒐集がまとまりましたので、何とか博物館の形体を整えることが出来るような気持ちになりましたのでいよいよ設置運動に踏み切る意思にもえたのでした。その時鳥類、昆虫だけでもまず釧路地方にて棲息又は捕獲したものだけで相当の数に達していました。私は私設博物館を建設する考えでありました。

ここで友人の高野源蔵氏がいかに私の片腕となって御支援下さったかを記しておきたいと思います。高野氏は当時釧路日報社の社長であり釧路市議会議員でもあられたので高野氏あって私は博物館が設立される運びとなったものであることを衷心より感謝しておるものであることを記しておきます。

設置運動に乗り出す目的の趣意書

私は友人の高野氏に自分の目的を細かに話を聞いてもらい御支援を願ったのでした。高野氏は心よく承諾せされ、３・４日後に、それではまず市長に会うとなって時間を約束してその日高野氏と共に時の市長茅野満明氏に会ったのでした。市長も私の話をよく御聞き下さいまして、それはよいことだから頑張っておやりなさいと賛成の意を表して下さいました。その時の話も私としては私設館と言う意味での話合いで出来得るだけの御支援を御願いするという言うことにとどまっての話でした。帰途の足で早速高野氏に立寄り今後の進め方について御相談申し上げましたところ、ただ話合ってばかりいたのではなかなかまとまらない。そ

れよりもまず趣意書を作って一冊の帳簿に賛助の諸氏の署名捺印を貰った方がよいと言って下さいましたので、私は早速一冊の帳簿を求め高野氏に趣意書を書いてもらい、それを持参して訪れることにしたのでした。

賛助員名簿を持参各氏を訪問賛助を乞う

そこで私は毎日のように足を棒にして知人や友人理事者並に各有志諸氏を訪れ私として後半生を自分の趣味を生かし博物館を作りたい、そしていささかなりとも釧路のため、学生児童の教材となし、また釧路を訪れられる方々の参考資料として供覧に供したいと云う一念、一方また地方文化の向上に資せんと心に契ってのことであること男一匹努力によっては出来ないことではないことを力説して自分としては心の意気を味わいたいのでありました。私は各有志を訪問した日数だけでも約二ヶ年余を要しました。この訪問を一口に云えばなんでもないものですが人見知りもないものが初めて人様を尋ねて訪れることはなみなみならぬ苦労ではありませんでした。留守の日もあれば出張されて当分帰られない方もありますし、二度三度と足を運んでも会えない方もありましてようやく八十人余の賛助員の書名をいただいたのでありました。振り返って見ますれば夢のようなものです。

運動中の苦労

私は初志貫徹の前には総て私費を以てまかないましたので文なしの私ではありましたが別に苦労とも思わなかったのでした。これは私は幼少の時（十一才）寺院生活に入った経験がありましたのでここまで辛棒させてくれたものと過去の時代を振り返っております。余言ではありますが、私は七才にして父に別れ四人の兄姉が母の手一つで生活せねばならなかったのでありましたから、赤貧洗うが如くと云う言葉の通り朝たべて夕べの鍋に入れるものがなかった当時、やむなく寺院生活となったので御座いました。この度もこの経験が身にしみておりますので将来かならず貫徹し喜びを迎えるのだと心ひそかに決意し精魂を打ち込んだのでした。幸にして親子四人も皆様の御支援に依って生きることが出来、今日あることを感謝の気持でいっぱいであります。

建設に当たっては愚妻さと子は蔭の力となり教鞭をとること約十ヶ年もの間、子供は子守の手にゆだね、得た金はほとんど資料購入費に消費してしまったのでした。私は私で計画と訪問に意を傾けて居りましたので生活費には想像以上の苦しみをいたしまして、こうした苦しみの中にもその当時釧路市内の骨董屋さん達と釧路市民の間で趣味のある方々が集まって月一回乃至二回せり場を開催したものでしたので私はその日には一度もかかさず参ったものでした。そしてアイヌの宝物と云う交易品や自作品の遺品は落札したものでした。そうしてほとんどその日のせり場にかかったもので必要なものは手に入れました。それですから金のない時は利子金を使って買い求めたことも度々でした。

斯様（かよう）にして蒐集に努力いたしましたが思うように集まるものではありませんでした。或る時はいらぬ事を考えては眠ろうとしても目がさえて寝れぬ時も度々でした。

考古学研究会のあることを知る

当時釧路市春採に牧場を経営し乳牛を飼育されまして市内にては愛厚舎と称する搾乳販売業をやって居られました安達清次郎と云う方がありました。その安達さんと私と知り合いになり、私も当時乳牛６・７頭飼育して居りました関係上互に牛のことから親しみ合うようになり、搾乳の出来る親しい御交際をして居りましたから私の目的についても御相談申し上げましたところ賛成して下さいました。

安達氏も春採に於いては有志の一人でもあり世話好きな方で部落民からも尊敬されていたのでしたから部落の人達の勧めによって市会議員にも立候補され当選されたこともありました。私は博物館のことを御相談申しますと、釧路には考古学研究会と云うのがあってその人達は石器だとか土器だとか、また何千年前のものであるとか何でも古いものを集めておられる会が作られているからその人達とも会うことがよいではないかと同行して下さいまして紹介して下さいました。早速会員の長老である桑原氏に紹介して下さいました。私も桑原氏に御会いしたのも初めてでありましたから、ただ自分の目的を１から10まで御話して今後よろしく御支援下さいますようにと御願して帰りました。その後会員であられる吉田仁磨氏や安部金六郎氏（現在の安部寛次氏）とも数回となく訪れては話しを進め、博物館が出来ることになった際には長年御苦労されて蒐集されたものを出品下さるようと御願いしたのでした。会員の方々も始めはどうかと思われる点もありましたが後には御同意下さる意思も出て参りましたので一安心したものでした。

このころには話もだんだん市営にするかとなって浅村助役も支援下さるようになって参りました。その頃のことは何事もスムースに行ったものではありませんでした。色々の話合いがあったからです。今となって見れば何の苦もなく一人でに出来たようにも考えられますが私としては考古学研究会員の方々に御出品を承諾下さるまでの間にも一苦労はありました。それは顧みてかえり見て考えて見ますれば当然のことであったのです。長年の間子供より大切に蒐集された品であれば紛失と云うこともなきにしもあらず、また盗難と云うことも考えねばならず、それに火災と云うこともあり、斯様に考えられる時出品についての決定は当然のことであったと考えられます。

この頃になって市立博物館として設置してはと云う声が出て参りました。また建物にしても新しく建てるとなれば多額の金を要することを市理事者並に市議会議員の方から話されるようになったのでした。丁度そ

の時市庁舎が狭いので本庁舎の上に増築して、二階を三階に増築と云う時でした（昭和９年）。この増築が出来上がれば隣にある別館の一棟が空室になるのでこれを当てようと云うような話になって来たのでした。この時釧路市立図書館もこれぞと云う小室もなく旧公会堂の片隅、市庁舎の道をはさんでの角の物置小屋同様の一棟に中に設けられてあったので市当局としては、この際別館の下を図書館に当たって階上を博物館に当てようではないかと話が着々と進んで来たのでした。

市立博物館建設の声と変わる

私は個人で小規模ながら私設博物館として設置して見たい考えから設立を念願してここまで万難を廃し努力して参ったのでしたが、市理事の方々や友人、知人から市立としてやった方が楽じゃないか、設立費にしても出来上ってからの経費にしても市営であれば毎年予算で市会がとれることになる。そして今後伸び行く釧路であれば釧路としても社会事業とし文化向上の上にもなくてはならないものになることだし、この際是非そうしてほしいと云うような話合いになりましたので、私としてはなんだかとんびにあぶらげをさらわれたような感じでもないではなかったが、出来れば社会のためになることだからそうしてやるかと腹を定めたのでした。そこで各新聞にもそのように話いたしました。その方向に添ってやって行くことを述べて紙上にのせて貰ったのでした。その当時の新聞社は釧路新聞社（現北海道新聞社）釧路日々新聞社（現在ありません）大東新聞社（現在ありません）釧路実業新聞社（現在ありません）その他釧路日報新聞社等がありましたがいづれも博物館設置についての重要性を記載してくれました。新聞記事については総て私から御話し申し上げて書いていただいたようなものでした。

私は助役浅村貞輔氏をたよりにして助役室に大西正一学務課長を呼んで発起人会をつくること、博物館委員を定めて依頼することなどを話し合ってそれは大西学務課長に一任することにしたのでした。数日後委員も決定、委員の招集を見たのでした。そこで浅村助役から此度の博物館設置についてのなりゆきを話されたのでした。その時集まられたのは日進小学校長の藤野先生、旭小学校の田中信一先生、それに元女子高女の留目先生、考古学研究会長吉田為造氏、発起人理事者からは大西、浅村氏、片岡新助等であったと記憶しております。

委員会は再度に亘って開催

博物館建設委員会として発足以来数回に亘って開催されました。

話としては陳列に対する概要品目や館が設立した場合の館則、条例等についての草案等について話合いがなされるのでした。大体条例や館則については他館の例もありこれにならって作ることにして当館は又当館としての事情もあるだろうからそれはそれとして学務課に一応御委せすると云うことにしたのでした。館則、条例についても三回程委員会の開催を見ました。釧路は初めて出来ることでもあり産声を上げるに過ぎない貧弱な館のことでもあり一般に公開して観覧に供するのが目的でもあったのだから料金はとらず無料として観覧させることにしたのでした。

市会の方も回を重ねる中にいよいよ本決定となりましたので、何はともあれ、今後は実際的に出品物の配列の内定、それに要するケースの製作等のことも出来て来ました。ケースについては寿小学校長の田中信一先生が設計せられ錦町の富田氏が作品を納入に当たられ実に良心的なよい作品を納入せられました。別館である階上は広場になって居りましたので別に手直しする必要とてありませんでした。ただ廊下の一部を仕切って館の入口と事務室として使うようにいたしました。それですから事務室とは名のみばかりで一間の九尺（巾二メートル、長さ三メートル）に過ぎないものでした。その中に机一ケと棚一ケそれが事務室でした。それらの品も申すまでもなく新しいものではなく廃品を持って来て間に合わせたのでした。委員会の最後に開催されましたのは昭和十一年六月十三日午後一時より市役所に於て標記委員会開催として開かれたのが委員会々合の終りでした。

市会は如何なる支費を見い出して通過したか

市理事者並に市議会議員も博物館設立と云うことに対しては一人として反対意見の人はなかったのでした。無論文化事業であり社会教育の一端である以上当然のことではありましたが最後に出来て来るものは金の問題でありましたがこの場合運がよかったと申しましょうか、師範学校を建設すべく寄附金を集めていた預金があったのでしたが学校の建設は中止となって預金のみが宙に浮いて、そのままに残されて居りましたのでその金の一部を博物館設立に使うことになったのでした。その寄附金は四千五百円程ありましたのでそれを三つに振り当てられたのでした。

市議会決定後

議会通過後は陳列品の蒐集については一層の努力を払い活動に乗り出したことは云うまでもありませんが浅村助役も非常な乗り気で御支援下さいました。

斯様に郷土博物館設置についていよいよ具体化してまいりましたので私達は郷土博物館協議会と云う名目で理事者の外、片岡、吉田為造氏、藤野、田中両校長が集まって打合せをいたしたのでした。郷土館開設に対する金は前に振当てられた金は図書館移転費共1,500円に過ぎなかったのでありますからそれでは出来ないと云うので学務（教育）の方から何とかすると云うことになり、当時の2,000円を以て設備費から開館までやると云うことになったのでした。それですから、蒐集費、運搬費とて一文もありません。無論私の

旅費とか食費などはある筈はありません。総て自費負担でやったのでありました。私は郷土博物館設立を思い立って以来開館までの２ヶ年余は無報酬でやった訳ですが開館となって見れば今までの苦労も何処にやら飛び去ってただよかったと喜びに変わりそして夢が実現し表れたことを考え今まで支援下さった方々に対し感謝以外にありませんでした。

予算決定後

私は初めから個人的博物館を建設してみようと云う気がまえであったのですから私としてはほとんど自分の力の限りを尽くして開館まで働き続けたのでした。無論理事者並に協議会の方々の支援はありましたことは云うまでもありませんが直接手を下しての協力の得なかったと申し上げても過言ではないと思って居ります。

私には考古学研究会員の皆様に対して御出品を承諾して下さるまでの交渉も一苦労でありました。然し開館前に御願いして御出品を得、陳列していただきたいのでしたから急がざるを得ませんでした。研究会の方々にしてみれば永い間かかって蒐集され子供同様大切に保存されていた研究品であれば石器にせよ、土器にせよ、そうなまやさしいものではなかったのでしょう。それで陳列については考古学研究会の出品物は会員の方に御委せしてケースの割当に対して思うように陳列していただくと云うことにして出品していただくことに話がきまったものでした。

兎角以上の様な話合いで出品が願われたのでした。特に安部寛次氏は考古学研究会の出品については御骨折り下さいまして陳列一切を担当して下さったのでした。

私は厚岸町松葉町に当時御住まいの向谷正次氏と知り合いの間柄でありましたので、氏の祖先の宝物が沢山あることを知っておりましたので、それを御借用して出品することを思い出し厚岸に参り向谷氏に会って此度の私としての事情や出品物に行きなやんでいることを話し御願いしたところ心よく承諾して下さったのでした。向谷氏の家柄は厚岸酋長（イコトイの酋孫）ウオカイの血統につながるのでありまして文久３年仙台藩厚岸勤番所（陣屋）より御味方コタン酋長ウオカイの拝領した品々又ウオカイ酋長は現在の太田村で開拓せらる際、うっそうたる森林で倭人にはとてもとても道すらわからんと云う時ウオカイ酋長は自ら先頭に立ち測量に貢献したと言うのでした。その功績に依って拝受したと言う得難い品々を御貸し下さったので私はその時こそ心から感謝の気持が涌いて来たことはありませんでした。氏はその当時母が生前の事故（ことゆえ）、母に話せば母は許してくれないから母のおられない中に荷造りするとて荷造をなし渡船場まで運んで下さったのでした。又私はこの日のことを思い出すと実兄のことが頭にうかんで来るのです。それは山形県米沢市から何年か振りでわざわざ私のところに来られたのでしたが、以上のような次第でしたので何のおかまいも出来なかったのです。私は厚岸に出て行ったので兄は私の多忙な事を知って気の毒に思い留守中に帰途についたのでした。そして小樽の駅から次の様な手紙をよこしました。*此の度は長々御厄介に相成り帰途は又沢山の土産までいただき有難く御礼申上げ候。甥姪には悪路御見送り被下感謝いたし候。今日は西部本道は晴天多分貴地も晴天かと察し申候。只今小樽にて小憩13時30分の急行にて函館に向うべく候。釧路出立の際新助に会われざりしは残念なりしも趣味を基に働き居る弟を力強く感じられ候。今後共折角目的の域に達せられる様祈り上候。*以上が兄よりの手紙の文面でした。陳列品の借用に関しては実際苦労の連続でした。一面識もないところを訪ねてはその家の家宝的なものを御願いするのでしたから面の皮を厚くしてと言いましょうか思い切って何も考えず出品と云う二字を念頭において御願するより以外にありませんでした。元図書館長の佐藤直太郎氏の宅にも伺いました。その時も御出勤前と思って朝早くに御訪ねいたしました。先生は石器、土器それにアイヌの遺品を少々所蔵なさっておられることを聞いたので御伺いしたのでしたから早速御話して御承知を得ました。先生は早くから考古学方面に御研究なさっておられたとのことでした。また当時市議員の佐々木米太郎氏も趣味でアイヌの遺物を集めておられることを聞き参上して出品を願ったのでした。また佐藤直太郎氏から浦見町の豊島氏宅に白糠アイヌから出たという16弁の菊の紋のついた金具附き青貝ぬりの手桶のあることを聞き、これまた早速伺って出品下さるよう御願いしたり、春採の山本多助氏を訪ねては氏の祖先の遺品を出品してほしいと御願いして山本多助氏の御承諾を得たり、この当時は筆舌につくせない程の忙しさで猫の手もかりたいと云う言葉がありますが、その言葉があてはまる忙しさでした。山本氏は釧路酋長「メンカクシ」を祖先とする家柄でありますので外居（シントコ）長刀（タンネップ）など数々出品下さいました。中でも長刀は当時全道に三振しかなかったと云う立派な出来ばえのものでした。然し日本刀の様に造られたものでなくアイヌ向きに造られた飾り刀であり中身は竹みつでした。

ケースの製作と購入と陳列

陳列ケースについては田中信一氏（元単置学校長）が設計され、錦町の富田家具製作店に於いて請負せられました。富田真吾氏は良心的に製作せられました。ケースは出来上りでは大きいので持込むことは出来ないところから大体の下ごしらえをして持ち来たり室内に於いて製作にかかられたのでありました。当時の富田氏も利益を離れて製作に当たって下さったのでした。こうしてケースも片端から注文通り出来上っていたのでした。

私はケースが出来上ると用意してあった木の枝や大木などなるべく立体的に並べ立て自然らしく材料の配

置を考え、そして鳥獣の棲息状態に見えるよう心をつかって配置いたしました。

昆虫は昆虫で科別に標本的に陳列いたしました。魚類も同様、海藻類、其の他の陳列品にも気をくばり陳列したのでした。

土俗品については元図書館長の佐藤直太郎氏、考古学研究会員の安部寛次氏と共に陳列いたしましたので佐藤直太郎氏、安部寛次氏はこの陳列になって初めて御手伝い下さったのでした。また石器、土器の陳列に対しましても研究会の方に御委せいたしたのでありましたから会員の方は考えられた通りな陳列になったのでありました。

土俗品や考古学的品目の陳列は互に責任を以て陳列されたので思ったより案外たやすく陳列が出来たのでしたが、鳥獣類はただ置くだけではありませんので約半月の日数を要したのでありました。その他国立公園内の模型や釧路市内の模型、それに釧路の発達史等を表に書き入口上に示したのでした。国立公園の模形は当時釧路中学校の松島先生の製作、釧路市模型は第三小学校の横田先生の作でした。釧路の発達の表は寿小学校の石川定先生が書いて下さったものでした。

斯様にして大体開館の準備も出来上がったようなものでまことにおそまつなもので館とは名ばかりでした。こうなると私は掃除が終り片端から陳列にかかりました。

かくして開館と定まったのは昭和 11 年 7 月 14 日でした。

私は市立郷土博物館嘱託兼市立郷土博物館委員を嘱託すと云う公式の辞令を昭和 11 年 6 月 20 日附けで市から発令になりました。

写真 1．開館当時の展示室（釧路市立博物館 50 年史より）

開館後の博物館と私

昭和 11 年 7 月 14 日漸く願望であった博物館の開館を見たのであるが、然し市自体としても博物館を独自の館としての予算を持つ訳でもなく、別に維持していくまでの考えもこれだと云って考えられてはいなかった。理事者間に於いても館長を誰にするかなど考えてはいなかった。ただ当時階下が図書館であったので、そこには主事の資格で勤務されて居った関係上博物館も兼務と云うので同館主事を兼ねることになったのであった。

私は市予算がないので本格的に公務員として採用は出来なかったし、また私としても当時家具工業会社の重役の立場で勤めておったので、別にどうしても博物館に勤務せねばならぬと云う気もなかったのでした。私は博物館の嘱託とし、博物館委員として昭和 11 年 6 月 20 日附けで辞令を受けていたので、手隙には博物館に通っていたのでした。趣味に生きようとして努力を払い、ここまできたのであるから博物館を見捨てることは出来ず、総てについて研究と蒐集に意を注いだのでした。昭和 12 年に図書館勤務事務員（菊池氏）が学校に入学すると云うので退職することになり、図書館の事務員の補欠が出来ることになったので、その補欠の意味で図書館事務員並に博物館勤務と云うことで昭和 12 年 4 月 1 日附で勤務することになったのでありました。私は図書館には出来得るだけの御手伝いをするが、私は博物館に全力を上げると云う話合いのもとに図書館の予算で採用になったものでした。

私が昭和 15 年 4 月 1 日附けで博物館主事の辞令が発令されましたが、仕事は博物館と図書館の仕事を兼ねてやっていました。

こうして開館時は私としては気苦労の中に博物館の整備蒐集等に努力を払って来たのでした。

図書館主事と共に蒐集の思い出

或る日曜日でした。天気も晴れており、野外に出るのは気持ちのよい日でしたので佐藤主事と共に春採に行こうと云うことになりました。それはこの春採部落に懐古館と云う建物（アイヌ小屋）があって、この建物が出来た頃部落の有志が集まって部落（アイヌ部落）の各自荷物を寄せ合って保存し、かつ部落を訪れる者に見せようとして建てられた一つの博物館的存在のものであったようです。

その建物はすでにこわれ風雨にさらされ、陳列品の大部分は各自の自宅に持ち帰ったのでしたが、或る一部の品は当初に鎮座する馬頭観音堂に保存しありましたので部落の有志であった、安達清次郎氏並に当時千才町に御住いの石井氏に話し、博物館に持ち出すことの承認を前以て得ておったので、その運搬をやろうと云うのでした。主事も博物館建設の話のない時分から部落に出入りし、部落の人々と交際も出来ていてアイヌの研究に努められて居ったようでしたから都合はよかったのでした。馬頭観音堂にはこれぞと云って目ぼしい品とてありませんでした。刀の鞘、それも満足なものはなく破損品のみでした。外居も数個ありましたが、陳列になるような完全なものとてありませんでした。兎角リヤカーを以て行ったので載せて運んで来ました。途中主事の知合いであった新谷礼助氏（アイヌ）宅に立寄り頸飾 1 掛けと酒杯 1 組（赤塗）を寄贈して貰って帰ったのでした。

主事は考古学研究者でもあられるので、館が出来な

い以前から釧路地方を始め、その方の研究を進められておられたので休日には床丹方面や茅沼へと出掛けられるのが常であったので、私も主事の指導を受けてその方へ手を出すようになったのでした。或る日茅沼に出掛け「シラルトル湖」の附近に貝塚を見つけ新聞に掲載したこともありました。また附近に住む人達から掘り出された石器や土器の破片を貰って来たことも度々でした。床丹にては岩渕宅前に骨塚の発掘をし、資料を得たこともありました。又竪穴の発掘もいたし鹿の角製の骨器などを得たこともありました。茅沼駅前に斉藤政六氏宅がありましたので発掘してあった石器（石匙）を貰って来たこともありました。その品は現在郷土博物館に資料として保存されて居ります。

襲来当時の博物館（閉鎖をまぬかる）

大東亜戦争は烈しくなり、本土空襲の機に直面する様になってきた昭和18、19年頃より釧路市民も空襲に備えての心構いをせねばならぬ様になって来ました。この頃或る理事者に於いては図書館、博物館閉鎖の声すら出て参りましたので、図書館としても博物館としても、漸くここまで目鼻が附いて来たのに、今ここで閉館してしまえば再度開館の機を得るのは容易ならざる事と思い、図書館主事は菊地三之助氏に相談に行く事にし、私は佐藤国司氏（前市長）に閉館せぬ様にと懇願に行ったものでした。斯様にして両館共に閉鎖を免れたのでありました。然し図書館にせよ、博物館にせよ、一時片付けると云うことになり、図書館の書籍は階上に上げ、博物館の品物は出来るだけ疎開することに定め、木箱を弥生町佐々木家具製作所に依頼して造らせ、出来上がりを待って土俗品を阿寒湖畔営林区駐勤所内参考館に移動疎開することにしたのでした。参考館は昭和12年に釧路営林署の委嘱を受けて設置したものであったが、昭和16年より営林署より借用することにして契約書を作り署名捺印の上互に一通を所持し、私は経営に当り無料にて開館参観に供して居ったものでありましたから疎開個所としても最も適当な場所でもあり、保存上も心配なきところから同所と定めたのでありました。箱は出来、品物が詰め込まれると早速市役所のトラックにて阿寒湖畔へと搬出疎開したのでした。然し鳥類、昆虫類、考古学資料は館内の一定の場所に出来るだけ破損せぬ様にと片付け、保存することにしたのでした。この際一番困ったのは昆虫標本でした。何しろ昆虫標本ケースは長さ9尺（約2メートル）の箱にしてその中に２尺～３尺のベニヤ板を入れ、その板に昆虫を附けていたのでしたから片附け様にもどうにもならず、大半は破損してしまったのでした。鳥類や、獣類も陳列したケースの中に使用した資材木にして現在使用しているあの大きなものでしたから、これも誰１人で片附けるのはなかなか骨が折れたものでした。その当時は図書館も主事１人、それに私は博物館主事で兼ねて図書館事務手伝いと云う様な形でした。博物館の方が大体片附けられると図書館の本は階上に運んで上げたのでした。図書館の本の大部分は博物館陳列ケースの中に出来るだけ積み重ねて保存するようやりました。図書館の書籍も整理され、書棚にある時は少なく見えるがいざ書棚から出して見ると想像以上にあるもので場所もいるのでした。それに後日の事も考え出来る限り整理されている順に出して置きたいと云う考えもあり、他で見ているようななまやさしいものではありませんでした。一番おそれたのは２階に上げてから両館とも閉館はしたものの本館廊下づたいに出入が出来るので紛失をおそれざるを得ませんでした。幸い多少は紛失せぬでもないようでしたが、まず思ったよりよく保存せられたのでした。博物館陳列品の中の考古学研究会の出品物や個人借用品の大半は一まず御返しいたしました。この整理で昆虫標本は無残にも玄関入口に押し込められ、永年苦労して蒐集した標本が破損せられ私としては感無量のものでした。

閉鎖後として毎日出勤、採集、発掘等に日を送っておりました昭和20年7月14、15日の両日空襲にあい橋北の約半分は火の海と化し、旭小学校や丸三鶴屋デパート等全焼したのでした。私達は公吏として毎日市役所に詰め、防空壕の中におる病人や子供にあたえる牛乳の調査係を申し付けられ、鶴ヶ岱、富士見町一帯の壕内を歩き回るのが役目でしたので毎日壕内を回りました。

こうしている中に約１ヶ月過ぎ去り、8月15日を迎えました。丁度この日は陛下の御言葉がある云うので誰しもがそれを聞こうとラジオに耳を傾けておったのでした。達しの通り陛下の御言葉がラジオに入って来ました。それは全国民全般にとってよかったのか悪かったかその受け入れる人々によって考えは違ったでありましょうが、終戦の詔りでした。日本は完全なる敗戦国となったのでした。

終戦後の博物館（丸三鶴屋デパートに移る）

昭和20年8月15日終戦の詔りがあって、大東亜戦争は終わったのでしたが、永年の戦争の後であり、市街は見る影もなきまでに建物は破損し、道路もまた修理も行われず凸凹道となり、幣舞橋の手摺に附随した鉄材は取りはずされ、橋北の四分の一は焼土と化したので、当時の釧路はあまりにも荒れ果てて見るかげもない有様となっておりました。こんな具合でしたから博物館とて戦争が終わったとは云い直ぐにとて手をつけて開館の出来ようはずはありませんでした。まず第一に図書館の書籍の積み上げられた書籍を階下の図書館に戻さねばどうにもならず、まずその方に毎日毎日全力を注いだものでした。図書整理に当られた主事も一苦労であったらしく見受けられました。学校生徒も、学務課から何日か手伝いに来て呉れた様記憶しています。こうして階上に上げた書籍がおろされると、今度は博物館の陳列にかかりました。ケースの位置を定め、愈々陳列となるとこれまた面倒なもので見たり考えた

ようにたやすく出来るものではありませんでした。魚類を立体的に飾るにしても、資材の置き方、鳥のつけ具合にいちいち意を傾注して取付けねば自然の棲息、状態、環境が表せないので面倒でした。石器、土器、土俗品は再度の陳列であるので、これは思いの外簡単に陳列が終わりました。其の他の魚類や昆虫標本類も数に於いては少なくなっていたが、何とか陳列が出来開館の準備は斯様にして出来たのでした。

昭和22、3年になりますと、本庁がだんだん狭くなり始めて参りましたので博物館をどこか場所があれば移転させたいと言う傾向が見えて来ました。その時丸三鶴屋デパート3階､終戦前は映画キネマをやって居った場所が空くと云うのでした。私は丸三鶴屋デパートは場所から云っても市街地の一等場所目貫きの場所であり、現在の図書館の階上よりは参観人も多いことであろうし、博物館とはどんなものかを市民一般にも見て貰って認識して貰うによい機会だと考えましたので丸三鶴屋デパート内に移ることを承諾いたしました。（昭和24年1月末日でした。）これでまず博物館は丸三屋上3階に再度移って開館となったのでした。丸三鶴屋も空襲に遭って内部は全部焼かれ、外部のみが残った有様で見るかげもないものでしたが、丸三鶴屋では全力を上げて復旧作業に従事されたので、修繕も思ったより早く出来上がったようでした。修繕が出来上がると私は移転の準備にかかったのでした。屋上の借用の室に対してケースの割り付けを定め、次に運搬の準備にかかりました。運搬にしても昼夜営業を行われている間はケースの持ち込みは出来ず、夜間閉店後に行ったのでありました。ケースと申しましても大きい物ですから持ち運びに一苦労でありました。ケースが持ち込まれますと、片端から据附け陳列にかかったのですが、これも場所が場所だけに紛失のなきよう破損せぬ様と心をつかってやったのでありました。

陳列が終わりますと、開館をいたしましたが、何しろデパート内の事ですから買物に来た人ほとんど入場すると云う有様でどうにもこうにもならぬ有様でした。入場されるのはよいがケースの硝子の破損には一番心配でした。硝子は直せばよいとしても怪我があれば困るので、これまた心痛の種でした。

こうして月日が経つのは早いもので半歳にもなろうかと思うころになると産業も復旧の傾向に立ち直りを見せ、物資もだんだん出廻るようになって来ました。こうなると丸三鶴屋としては博物館に一日も早く出てもらいたくなって参ったのでありました。こうしている中に契約期間の1ヶ年は目の前に迫って来たので、この期を逃してはと丸三鶴屋の方では移転してほしいと市の方に持ちかけて来たのでした。〔丸三鶴屋両角克治社長との話し合いの際に〕私も決して横にねるとか、横車をおす意思はないが行くところもないのに出る訳には行かんですと腹を割っての話で、互に男同士の話だから互に生きるようにやりましょう、と申しましたところ、どうすれば移転できるかとなりました。そこで私は30坪の建物を建てて貰えば、そこに移してもよい。それは今年度の市会にて既に昭和25年度予算にて2ヶ年継続計画で博物館を建てるとして、予算250万円を見ているので、来年になれば何も云わずに移れるが、今の中に移るとせば左様願いたい。その30坪は将来講堂として使用したい意向であること。市予算にはこの講堂は打ち切られて建築費が含まれていないので、何とかしてほしいと頼んだところ、両角社長は2つ返事で承知して下さったのでした。早速土地、選定となったのです。市の方では現在のところ他に2ヶ所程あったので、御前のよいところを選んで建てれとあっさり今で云う都計の話であったので、私は現在の鶴ヶ岱公園現位置を選んで建てることにしたのでした。

私も両角社長は建物が出来て人間が入るまでになれば、年末であってもどんなことがあろうと移転して正月には売出しの出来るようにたしましょうと云い切ってあったので、互に急いだものでした。それから移転に要する費用は全部丸三鶴屋が支払って貰うと云う約束でしたから、私として見れば私の物か市のものかわからないようなものでした。

斯様にして暮れも暮、昭和24年12月28日に漸く移転は出来ましたが、ケース類は運んだとは云うものの、道路の左側になげっぱなしと云う有様でした。目の廻るようだと云う言葉通りでした。私は移転と同時に新築された30坪の片隅に1室作り、そこに寝泊することにしたのでした。こうして1ヶ年余生活をしたのでした。

博物館新築声上る

昭和22、23年頃になりますと、本庁舎もだんだん各課共増員拡張されて横溢する様になって来たのでした。

そうなると当時の博物館、図書館はまず第1に使用することが誰が考えても当然のことで、そこで図書館にせよ博物館にせよいずれは個立した建物が必要だと言う声が出来て来ていたし、私も時を見て何とか博物館を建てねばならぬと考えていたのですからこの時とばかり呼声を大にして博物館新築運動に乗りだしたのでありました。乗り出すにいたしましても理事者並に市会議員各位の賛意が必要でありその気になってもらって運動を盛り上げねば出来ぬ事故、それについては充分なる考慮を払わねばならず一苦労でありました。

私はただ幼少の時から博物学的な方面に趣味を持ち将来は博物館でも建ててみたい、そうして社会教育の一端にでも資せたいと云うのが希望でした。私はもともと学者でもなし、ただ一生を趣味一筋に生き貫くとしたに過ぎない者ですから私は時々「彼は野人だ」とか何とか、よく云われたものでした。その代わり私は一度やろうと考えやらねばならんと決意したからには誰が何と云おうと、金がなかろうがあろうがそんな事

には空の風で、目的に進むのが私が生と共に持って来た生命力であったのであると申し上げて置きたいのであります。

斯様な私でありましたからこの新築の声を上げた上は是が非でも建設の一念で奔走いたしたものでした。

昭和25年以降の各新聞切抜

昭和25年1月17日発行の東北海道新聞に掲載された記事に次の如くのっています。

植物、動物園も併置、市議会へ陳情、約300坪で二階建てと云う見出しで、釧路市の都市計画に織込まれて観光都市に恥じない市立博物館、本年中に建設される希望が強くなっている。

釧路市立博物館は市内北大通り鶴屋デパートの三階の一部を借りて開館してから約半年その施設の窮くつさにもかかわらず約1万点が陳列され、このうち先住民族についての資料は全国屈指で他に比を見ない貴重なものが多くその点全国一をうたわれている。動物標本の中でも親子の丹頂鶴やエゾ鹿などは他にはないといわれている。参観者も昨年の開館日数238日間に一般841,318人、他館内学校48校34,026人を数えている。市の独自な文化施設としての新館建設はかねてから協力に要望されていたが、大釧路建設の構想に基く都市計画の中の公園計画、文教計画に織り込まれ、市内鶴ヶ岱ひょうたん池附近の台地に適地を求め290坪二階建とする計画がすでにでき上っているこの経費は900万円が見込まれている新博物館はロックガーデンや植物園、小動物園をもち、第2次計画として淡水魚を主とする水族館の附設ももられている。新博物館の構想は次の通り

陳列室7室

第1郷土室　郷土に関する陳列を主とし模型、地図、文献を中心に釧路地方開拓者の遺品、阿寒国立公園の紹介など。

第2郷土室　郷土作家の作品と工芸品、発明品などを陳列する。

第3郷土室　道東地区で蒐集した、博物標本を陳列する。

第4郷土室　物産室として特産品、工芸品の展示と製作工程を紹介する。

土俗室　アイヌ文化の紹介と歴史的な解釈をする。

先住民族室　道東地方で発掘したものを考古学的に陳列する。

参考室　南洋、大陸などの蒐集品を陳べる。

講堂

約200名収容、講演会、講座などに利用し、幻燈装置、16ミリ映写装置をする。

その他標本製作室、館長室、小使室もある。

予算通過と新館開館準備

市立郷土博物館の新建築は昭和25年度予算市会に於て原案通り可決をみたのでありましたが、この場合も種々難色はありました。市議会議員の某氏は図書館、博物館など建てなくとも別に家屋はあるではないかとか、建物を建てたところで個人のものを取り除けばいくら残るかとか、また或るクラブ議員は全員反対されたとか一寸考えられない場面もあったのでしたが当時の佐熊市長はこの場合も各議員に対し博物館新設は如何に都市の文化水準を保つ上から重要であるかを力説され、御賢察の上財源困難ではありますが御諒承を願いたいと述べられたのでありました。斯様にして曲りなりにも予算は可決したのでありました。

こうしている中に釧路市大川町（幣舞橋右岸現在日本銀行の位置）に釧路信用組合の事務所がありましがた昭和20年7月15日の敵の空襲にて爆弾投下破壊され、復旧の見込みなくとりこわされたのでありました。そこで釧路警察署が増築されたのでありましたが、昭和24年釧路市に日本銀行釧路支店が設置せらるることになりその位置は釧路警察署の位置がよいと云うことに決定したので折角新築した警察署もとりこわさねばならぬことになったのでありました。ところでその警察署の資材を何に使用するかと云うことになったのでありますが、建物が建物だけに学校には小さい間取りは他に使用となると思う様に使えないところから市理事者に於ても困ったようでした。その時博物館に使ってはどうですか、何とか間に合わせてほしいと云うことになったのでした。私も予算は決定しているのでどうかとは考えましたが予算の250万円は2ヶ年計画であるし、警察署を手直して一期に完成させるのもよいと考えましたので承知したものでした。古材と云いましても2ヶ年余しかたって居りませんから資材は別に腐って居るものもなし、間仕切や硝子戸は私の思うように手直して作ると云うので昭和26年3月19日富士見町五十嵐一夫氏競争入札落札にて建設にかかられたのでした。当時現在の場所は畑のところもあり道路から坂のように池の岸まで斜になっていたのでしたが土工の方は田中組の高橋熊太郎氏が請負い現在の教育会館の位置から土をトロにて運搬土盛り現在の広場に造り上げたのでありました。基礎コンクリートから建築へととりかかられました。斯様にして開館式が挙行せられたのは昭和26年7月28日でありました。

陳列棚、購入に就て

新館は曲りなりにも出来たものの陳列ケースはないので今度はケースの心配でありました。何とかして開館まで造らねばならんと、考えた末釧路市北大通り家具店松並氏に相談を持ちかけたのでありました。こうしてケースも新館に間に合う設備をなしたものでありました。

講堂として使用すべく両角氏より折角建てていただいた30坪の講堂にも机1つ椅子1個である訳でなしこれ又困ったものでした。無論予算とてある筈もありませんでした当時でしたから何とかして講堂らしい講堂に造り上げたいと考えたのでありました。考えた末

知人である樋口丈助氏は机 20 ヶと椅子 41 ヶ目下不要なものがあるとの話を聞き、早速樋口丈助氏に会って話合ったところ品物はあるが支払はどうなると云うことになったので私もめどのついている訳でもなく一時困りましたが博物館法制定により文部省から補助金があるのに気付きました。

最後に書き加えておきますが私は今日まで市に対して貸与品として市に貸しておいたのでありましたが設立前から市が独立した館が出来上った際はいつでも無償にて寄贈すると云う約束をしておったのでありますから此度立派な白亜の殿堂（博物館）が出来上りましたのですから私は昭和 26 年 7 月 20 日に目録を附してあらためて釧路市に採納願を提出したのでこれで私としても御約束を果たしたものでありました。

釧路市採納第 3 号により昭和 26 年 7 月 23 日附で釧路市長佐熊宏平名にて採納通知を受けて居りますので、その後は完全なる市財産となったのであります。

写真 2.　鶴ヶ岱新館写真（館報 283 号表紙より）

植物園と動物園の形態を造る

昭和 27 年より過去 12 年間私は博物館前を庭園に造ると云う目的で植樹につとめて参りました。博物館をこの地に建築された頃は池の周囲は無論傾斜地でありまして木が一本もなく、戦争当時は誰かれとなく耕してはジャガイモ、大根を蒔き、食料の一端にと主婦達は耕作にいそしんでいたものでした。然し戦争は終り公園とし市民一般の憩の場とするようになれば植樹もせねばならんし、生きた物（動物）も少しは飼育せねばと考えて、私費を投じ或いは寄贈を受け、寄附金を貰って毎年春ともなれば若干づつの植樹をやって来たのでありました。

私は博物館を退職するまでの 12 ヶ年の間、檜の木を植え桜を植え或はナナカマド、イタヤモミジ、落葉松、サビタ、ハクヨウ、ヤチダモ、クルミ、モミジ等数種の植樹をいたしました。そしてその一本一本に名札を附けて植物園の形態を作りたいのでありましたが、それまでは出来ませんでしたが、今元気に育った植樹を眺めますと云い知れぬ嬉しさが胸にこみ上げて来るものを感じます。春の芽生、夏の青葉、秋の紅葉、然しこの数十種の植樹もこうなるまでにはやすやすと成育したものではありませんでした。毎年植え込む植樹の中三分の一は枯れて行きました。

それに負ずと植え込んだ当初は朝は四時半、五時に起き、または雨降りと云えども体をずぶぬれにして植えた苦労も今は過去の夢となり、ただ毎年成育し元気に延び行く木、木の梢が私を喜ばせてくれます。今後は幾十年の後全部とは行かずともたとえ一本なりとも大木となって育ってくれたら市民を喜ばせ憩の場としてくれることを喜んで居ります。

池の片隅に飼育されております動物達も私は最初は丸太を建て貫きを打ち金網を自らの手で張って飼育したのが始めでした。丁度終戦前（昭和 13、14 年頃）釧路の各所に於て、養狐場があって狐を飼育して居ったところは各所に見受けられたものでした。それで各養狐場では飼育場を造るために大量の金網を仕入れたものでした。ところが大東亜戦争ともなると、毛皮の輸出が止まり且つ又飼料さえ出回りが悪くなって参りましたので、養狐業者はすたれ始めて参りました。私の知人にも養狐専門に飼育して居った者がありましたが、廃業することになりまして倉庫に残って居りました金網は不要となりましたので譲り受けてその金網を張り、大鷲、シマフクロ、トビ、エゾフクロ、狸、キツネ等飼育を始めたのでした。

次に池の中に植えてあるスイレン、ガマ、ミゾササ、ヒシ等も私が植えつけたものであります。スイレンは五種ありましたが現在は総て白色の花弁と変りました。私はこの池には水中植物を出来るだけ数多く植え込んで水中植物園にしたい考えでありました。これが博物館としての生きた教材といたしたい所存でありました。

今後も引き続き誰れ彼れとなく互に労力をおしまず鶴ヶ岱公園のため御支援在らんことを願うものであります。

初掲載

1965 年 1 月　館報 156 号（合本 7 巻 p87-88）
1965 年 3 月　館報 157・158 号（合本 7 巻 p98-101）
1965 年 4 月　館報 159 号（合本 7 巻 p108-110）
1965 年 7 月　館報 160・161・162 号（合本 7 巻 p122-125）
1965 年 10 月　館報 163・164・165 号（合本 7 巻 p146-154）
1965 年 12 月　館報 166・167 号（合本 7 巻 p168-170）
1966 年 6 月　館報 171・172・173 号（合本 8 巻 p19-24）

写真 3.　創設時の釧路市立郷土博物館
（釧路市立博物館 50 年史より）

写真 4.　考古学資料展示会／昭和 36 年（1961 年）11 月 4 日
／左：安倍寛次、右：片岡新助氏
（釧路市立博物館 50 年史より）

写真 3.　昭和 34 年（1959 年）当時の職員／前列左より種市、
後列左より本間、片岡、澤（釧路市立博物館 50 年史より）

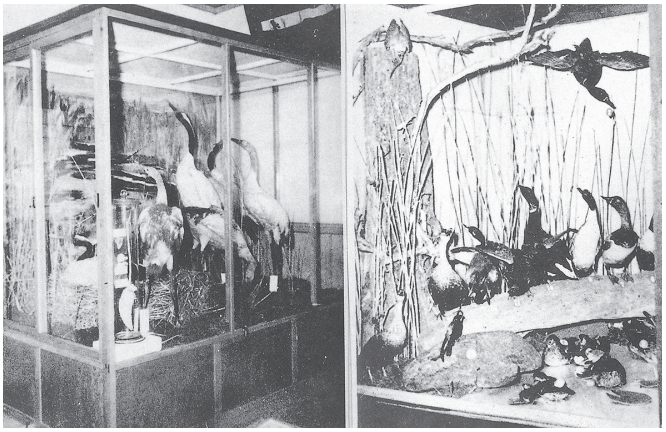

写真 6.　昭和 30 年（1950 年）当時の展示室
（釧路市立博物館 50 年史より）